

会報発刊に寄せて

伏見 弘（会長・教授）

この度はからずも会長の大役を御引受けすることになりましたが、日本のエネルギー資源対策、地下資源対策など、国家永遠の諸問題を根底から方向づける必要のある折でもあり、我々大学の人間も会員諸氏と共に手を握り合って国家発展に寄与しなければならぬと存している次第です。

国内資源の利用状況を振り返ってみますと、金属資源としては東北の黒鉱地帯に僅かな活気を見る程度で、非鉄金属原料は余りにも乏しく、需要を満たす迄にはとても到らず、鉄資源にいたっては全面的な輸入に頼るのみで一方、硫酸さい（滓）、砂鉄などは歓迎されぬ状態にあります。また石炭はその埋蔵量の点では、非鉄金属に比べ多いのですが、油に押され、生産合理化に苦しんでいる現状であります。採掘条件、選鉱（炭）処理条件等、他国では見られぬ困難性も、これら沈滞モードに拍車を掛ける一因ということができましよう。

然しながら、技術的水準からみますと、世界第一流の水準にあることは衆知の通りであり、そこに今後の日本の資源産業は、国内は勿論、海外の資源開発、処理（製精、抽出、加工）、安全維持（公害対策）など技術的發展とその応用面から、国力を豊かにする一助となり得る余力を持っていることは間違いないところであります。そしてこれらを実行の方向にもってゆくには、如何したらよいか、これこそ我々技術者としての使命であり最大の課題であると考えています。

私立大学で理工学部を開設し資源工学科を

持つのは我が早稲田大学のみであり、その設置も古く、日本経済の発展に寄与すべき工学技術、人間性を我々は仕込まれてきました。その結果すでに日本のみならず、世界の「資源工学科」としての役割を共々果しつつあると自負しても過言ではありません。これは、古い先輩諸兄は勿論、最近卒業された若い人達の一貫した努力と、精神的つながりの結集された成果であり、あらゆる場所で当科出身者達のバイオニアの苦心が芽を出した結果であると思っております。勿論教室にいる我々としても、これら輝やかな成果におごることなく、「採治」から引継がれた良き資源工学科精神を、より高く維持すべく、常日頃努力いたしていることも御了承下さい。

幸い会員各位の御協力、了解のもとに今後当会の諸行事を一そう活潑にすべく、連絡ニュースを発刊することに決定しましたが、要は諸先輩、卒業生各位の暖かい支援があってこそ、その意義が生かされるものであります。

戸山ヶ原に理工学部移転も完了しすべてに新規一転した折でもあり、どしどし我々に御忠告、通信などを御寄せ頂き内容の充実、会員相互の親睦等、名実ともに「新しい」ものにしてゆきたい所存です。そしていずれは、技術的問題を論ずる場としても発展できるよう、切に希望しております。

我々の活動が、日本の資源工学活動の灯となり、広く活用されることを期待しつつ、会報発刊の辞に代えさせていただきます。

< お 願 い >

資源工学会費は年間 500円です。御送附の際はなるべく振替（口座番号 東京・143534・資源工学会）を御利用下さい。

資源工学会の発足

井上 勇（前会長・教授）

学生から大先輩に到るまで資源に取り組みまたは取り組んで行こうとする同学の士が一堂に会する機会が少なすぎる。かつての採鉱冶金、鉱山の時代は教員の学外での活躍の場も、先輩の社会活動の場も、学生の実習地も殆んど一致し相互の接触の機会が多く同学の士を殊更集める必要もない時代であった。しかし、学科の対象が拡大し卒業生の職場が分散して多様な形で資源と取り組みはじめた今日、教室の各個の力では全体をカバーし切れず、学生と先輩の接触も傾にうすれ交流の機会の少ないのを歎くことになったのである。

田中正男学科主任の頃からこの欠陥は痛感され、新会名を公募して資源工学会の名称を定めたり、学会バッヂの図案コントロールを試みるなど新しい組織化の手が打たれはじめた。

偶々田中先生の教務主任兼務の重荷を私が肩代りし、当時の3年生（42年卒）有志と新組織の準備中に例の学生紛争が巻き起こった。この騒動の中で誰でもがひとしく痛感したのは、われわれの学科の連帯感を育てることの必要であった。それで紛争の終結と同時に急速にこの機運が盛り上がり41年7月に取敢ず在京の先輩に呼びかけ久しぶりに総会を開き先輩、学生と教員が一堂に会した。

総会を開くまで2ヶ月余ほとんど毎週学生と打合せ、運営のため会費を貰い受け、会報の発行、集会の開催、理工展への協力、親睦運動会など活潑な活動を主として学生の手で進めることを決め、私はその任に当って新会則を起草した。

騒動が幸して学校への関心が高まっていた故か、総会は盛大で各年層の参加があり、激励の言葉、協力の提案があり、参加した学生達は自分達の背後に先輩の築いた偉大な伝統のあることに開眼し、学会の意義を強く感じ

取った。

これに力を得て新学会の活動がはじまったが、新校舎への移転などに忙殺され今春を予定した総会は夏を越してしまった。けれど、その間岩崎先生を中心に困難な名簿整理、総会通知などの作業が夏休をはさんで続けられ10月28日の総会の段取が進んだ。

全国の全卒業生に呼びかけどれだけ返事が来るか、会費納入にどれだけ答えて貰えるか出欠の返事と振替払込通知の状況に気をもむうちに当日が来て、出席者も会費の納入も期待を越えるものとなり、先輩諸兄が母校のわれわれの学科を暖く見守って呉れていることが判り、この会の前途に明るい見透しが得られたのは喜ばしい限りであった。

資源工学会は漸く発足した。しかしこれからこれを守り育てることは生みの苦勞に数倍する。大学は教育と研究の機関として絶えず進歩、変貌して行ってこそ本来の使命を果せる。大学の評価は学内の研究の成果と共に卒業生の社会における業績によって定まる。そして、卒業生の社会での活躍が大学に反映して更に生々発展の力が生み出されより大きな使命が達成されることになるのであろう。先輩と教室の交流が強くのぞまれる。

社会に活躍する人は後に続くものにその成果を与える要があり、後に続くものは先人を踏み越えるためにその業績を継承する必要がある。先輩と後輩の接触は欠く可らざるものである。この間にすこしの断絶があってはならない。

この交流と継承の役割を果すものがわれわれの学会である。すこやかに育つよう各位の協力を切に祈る。

採 治 会 回 顧

中野 実（教授）

教室と卒業生とのつながりは密接なほど、お互いによいことは判っている。しかし、判っていても仲々実現出来ない。今から35年

ほど前、私が教室の下働らきの頃でも同じ悩みがあった。

当時は時々先輩からの申入れがあると簡単に採治会が開かれた。集る者は少く、また、いつも顔見知りの人々ばかりであったが、先輩達の昔話が面白く拝聴出来たし、あとで、しっかりやれというお叱りもあった。卒業生とのきづなは、このほかに採治会月報?という研究報告兼消息誌が不定期に刊行され、また理工学部一本となった卒業生名簿も大学から毎年出されていたので、今に比べるとはるかに強かったのである。

しかし、この月報も、私が教室に入った頃には事実上“停刊”状態となっていた。

その後、塩沢、三宅両先生の御尽力もあって、研究報告は別に大部のものを出し(実際には出なかったが)金のかゝらない薄いもので卒業生との連絡を計ろうとして出来たのが“採治会通報”であった。これは5~6ページの薄べらなものであったが、ともかく、きづなは出来上がった。編集の下働きは当然私の仕事であった。

残念なことに、これも間もなく停刊となってしまったのである。理由の第一は、卒業生が消息を提供してくれなかったこと、第二は余り薄くて教室の情報と研究消息がのせられなかったこと、第三は、卒業生が少ないため印刷費が最も割高かであったこと、また卒業生は消息のほかに会費も提供してくれない人が大部分であった。

これで、またまたストップとなったが、ほんとの理由は私の腕と責任感の両方が駄目であったことかも知れない。

第二次大戦を境として、先生方の年令も断然若がり、再建の意欲も手伝ってガリ版の研究報告に始まり、その後早大鉱山学研究報告と、かなり立派な、水準の高い報告が出現し、しばらく連続した。ただこれには卒業生の消息は殆んど掲載されず、一方交通の研究報告の形がとられていた。中でも昭和32年

版の硫黄特集号などは、当時の学界でも注目に値した立派なものであった。

しかし、この寿命も10年程度で終わった。これは、明らかに資金不足であった。このほかに終戦後2回の卒業生名簿は出したが、これも全く不連続で、只今卒業生との連絡は最悪の状態であるといえよう。

◇ ◇ ◇

去る昭和42年10月28日開かれた資源工学会(旧採治会)は空前の盛況で、集會者200人に達した。これが楔機となって、今回新しく“資源工学会々報”が実現した。いままで三回生れては消えた経験もあり、私としては今後は是非長くつゞけてもらいたい気持ちで一杯である。

昔日の情勢とのちがいは卒業生が断然多くなったこと、研究報告等は理工学研究所や外部の学協会誌にまかせられること、また諸先生は、昔とちがって多忙すぎるが、これらの活動はそのまゝ教室よりの情報、消息として誌上にのせ切れないほどあること、などである。

このほか、卒業生の働く分野も断然拡大されている。したがってお互いの連絡は、友情のほかに情報の価値にも通じるものがある。

たゞ、私の経験からしても、編集当局の一人相撲では行きつまる心配がある。卒業生諸兄の心からなる御後援を頂きたいと願う次第である。

お 記 び

総会が2度もあって、会報がでて、それでもなおかつ“資源工学会・会則”ができ上らないとは、まったく当方の片手落ちで失礼致しております。

第2号と一緒にお届け致す予定ですので、いましばらくお待ち下さい。

資源工学会・総会・懇親会開かる

昨年7月に続き、第2回総会、懇親会は、天気晴朗なれど風強き10月28日午後2時より西大久保の理工学部新校舎で開催されました。

会長、井上勇教授(資源工学会々長は会則により学科主任が担当。なお11月1日付をもって学科主任は伏見弘教授に引継がれましたので会長も自動的に交替致しました。)の挨拶と報告ののち、中野実教授による「炭鉱保安の回顧とその現況」(同教授は炭鉱保安の功労者として総理大臣表彰を受けられました)萩原、房村両教授の「諸外国における鉱業事情(実際には珍道中奇談?)紹介」、および昭和28年卒業生田中敏夫氏(現・科学技術庁勤務)による「イランの産業と国情」とそれぞれ題する講演があり、伏見弘教授の閉会の辞によって総会は終了致しました。

なお講演に先立ち、米沢治太郎先生が米寿のお祝いを迎えられた由の報告が会長よりなされ、盛んな拍手のうちに記念品の贈呈がおこなわれました。

引続き各先生の先導で新校舎の見学に移り学内一巡ののち、1号館会議室における懇親会と相成った訳ですが、折しも早慶第1戦勝利の報が入り、遠く福岡、岡山、富山などから駆けつけた会友を含む170余人の参会者によって会場は割れんばかりの大さわぎが閉会定刻8時まで続いた次第です。

参会者の方々の会話から、その2、3をひろって次に御披露致します。

某工場長氏「若い人と酒を飲む、まさに無上の快樂。この次も是非呼んで下さい。」

某常務氏「18階から眺めた夜景がすばらしかった。新宿、池袋のネオンの輝きは一際郷愁を感じたネ。」

某中堅社員氏「ワセダも立派になった。学生諸君、大いに勉強して呉れ給え、僕等の頃はワセダウイスキーの製造法しか教わらなかったのだからー。」

学生某君「大人って、案外無邪気だな。」

資源工学会・総会・懇親会 収支決算報告

1. 収入の部	2. 支出の部
会費：125,000円	経費：125,350円
祝儀：1,000円	
計：126,000円	計：125,350円

(経費内訳)

懇親会飲食代119,290円、生花車代2,540円
謝金損料3,520円

3. 収支 650円(残)

以上の通り相違ありません。なお残金650円は、資源工学会年会費収入分に繰入れさせていただきますので御諒承下さい。

昭和42年11月25日

資源工学会々長 伏見弘

昭和42年11月25日現在、資源工学会年会費は計202,500円に達しました。本来ならば早速礼状に添えて領収書の発行を致すべきであります。会員名簿の発送(昭和43年5月頃の予定)により代えさせていただきます。とりあえず御協力に対し御礼申し上げますと共に御報告致します。

ワセダ祭

資源展報告

緑川 宏(理工展委員・3年)

今年は資源展が始まって7年目、資源展発祥初期の、資源工学科への認識を深めて頂くという目的から近頃は、資源工学科の掲げる広い目標の中から、焦点をしばって取り上げられた事象をテーマとして選び、テーマを通して資源工学科を理解して貰おう、という傾向になってきました。事実、昨年は<石炭>というエネルギー資源を取り上げ、石炭鉱業に関連した諸々の問題に対する分析を試みたのです。

今年も昨年との関連を考え、資源として重

要な地位にある<石油>をテーマとした訳ですが、石油にまつわるイメージの調整、客観的見解の統一といった問題で、展示会としての方向性決定には幾多の曲折がありました。

結局実際の展示にあたっては、テーマを5ブロックに分け、各ブロックを有機的な関連によって繋ぎ合わせる、という方針を確立した訳です。すなわち、石油の成因に関する「歴史」、いかにしてその存在を知り生産に導くかを「探査・開発する手法」、そして「生産と利用」の面で「石油が他のエネルギー資源に与える影響」は如何なものか、そして最後に、人間生活への関連として、人類が石油に期待したものとは逆に、如何に苦しみをもたらしたか、を「石油と公害」の点から、それぞれ追求してみました。

かくして11月1日から5日間に亘る資源展を迎え、そして終わったのですが、不勉強な点だけが今もおお強調されて私共の脳裡に残っていて、お客様にもさぞ迷惑を掛けた事と反省している次第です。唯担当者としては最善の努力を尽したつもりですので、この点だけは何卒御諒承頂ければ幸甚です。

なお、資源展の開かれる3日前、資源工学会総会が行なわれましたが、その折多額の寄附を頂き(総計18,000円に達しました)これが有力な財源となりましたこと、また先輩諸氏の御尽力によって貴重な資料、器具等をお貸し頂けたことに対し厚く御礼申し上げますとともに報告させて頂く次第です。

∞ 新卒業生の就職状況 ∞

来春卒業する資源工学科学生諸君の、就職等による着き先は、お蔭様でほとんど決定いたしました。分野別にその分布を示しますので、今後共御引立ての程御願ひ申し上げます。

A : 鉱業(含採油、採石)	7
B : 鉱工品製造業	11
C : 石油、化学工業	4
D : 土木、測量、調査	10

E : 商社、販売業	4
F : 空調、電子計算機	4
G : 自 営	2
H : 大学院等進学	7
I : 未 定	2

計 : 51人(卒業予定者実数)

鉱業関係就職者数は相変らずの低迷状態ですが、製造業、土木、コンサルタント関係への進出が次第に多くなる傾向を示しており、この部門における当学科卒業生への認識と関心が高まってきた模様で、今後の就職見通しに光明がさして参りました。この点、先輩諸氏の御支援の賜物と深く感謝致します。

なお現在未定者2人も、就職のメドが立ちましたので、速からず100%就職の実績を築くことができそうです。

~~~~~ * あ・ら・かると * A LA CARTE * ~~~~~

○懇親会々場附近に、ある種の<関所>が設けられ、イトムクツキオノコ立ちはだかり、早稲田祭資源展の喜捨強要に及びたるの儀、会友諸氏にはさぞ驚かれた事と存じます。総会の時期をワザワザ選んだのではないか?等とカンぐるむきもチラホラ。しかし「当局」といたしましては斯様な意図は毛頭なかった事、ここに公式言明いたす次第です。(カゲの声、ソノ折はオオキニでした)

○井上勇先生、11月1日付で理工学研究所長に就任。田中先生、一時病気のため静養中でしたが、現在すっかり御回復されました。いずれもメデタシ、メデタシ。ただ今度は今井直哉先生が、ショーバイ柄のなせる業かどうか知りませんが、ボーコーに何やら岩石を発見された由(ホントニ、体だけは大事にして下さいヨ)。

○会報は当分の間<随時発行>という形になりますが、できれば<旬刊>にしてゆきたいと思っています。つきましては会友諸氏

の投稿を切にお願い致します。ただし、原稿料の方は何卒ゴカンベンの程を、原稿用紙だけは豊富にありますので、御申付あり次第送らせて頂きます。

○会計・編集・その他資源工学会関係の雑用はとりあえず岩崎が担当いたします。諸事万端不慣れのため何かと手違いも起る事と

思いますが、情状酌量のうえ御容赦下さい。

○交通禍にスモッグ禍、はては物価ダカ(禍)まで加わって、ホンニこれではショウガナカ(禍)。まったく三題咄のオチにでもなりそうな御時勢ですが、どうかお体を大切によい歳をお迎え下さい。それでは<御安全に、御安全に>。

尋 ね 人

下記の方々(敬称略)の住所等、判りましたら至急 資源工学会編集部迄お知らせ下さい。()内は卒業年、T=大正、S=昭和。

〔あ〕阿野昇(S-29) 赤石寿夫(S-40) 浅田長生(S-25・専) 阿部忠雄(S-28) 有岡宏(S-19) 安藤忠男(S-7) 東与三二(T-3) 秋山東生(S-35) 愛甲竜一(S-23・専) 青木竜彦(S-23・専) 天野賢之助(S-22・専)
〔い〕一宮虎彦(T-13) 井山一(S-30) 井上武(S-34) 井上順仁(S-23) 磯部三郎(T-5) 磯行三(T-15) 飯田喜郎(S-17) 飯田重固(S-25) 飯泉豊(S-20) 稲坂鴨三(S-23・専) 稲垣博(S-22) 稲葉浩之(S-40) 伊熊忠男(S-22) 伊賀崎甚助(T-12) 伊藤弘(T-14) 今井敬明(S-22) 今井進(S-40) 石田倫男(S-29) 石黒照国(T-8) 石井東作(T-6) 岩崎徹(S-22・専) 池田明(S-40)
〔う〕氏家(矢内) 凌(S-18) 梅木賢(S-36) 上田素之(S-34) 内木明彦(S-38)
〔か〕江島毅(S-19) 海老原一男(S-22・専) 海老原安太郎(S-22・専) 遠藤正雄(T-8)
〔お〕近江秀男(S-17) 落合光三(T-12) 沖弘之(S-34) 追手俊行(S-34) 荻原政彦(T-14) 尾形守房(S-36) 小倉達行(S-30) 小野宗義(S-36) 小笠原竜彦(S-23) 小川義裕(S-40) 小宅正英(S-40) 小沢史郎(S-35) 岡島博(S-23) 大野泰治郎(T-13) 大立馨(S-22・専) 大前集哉(S-24) 大松正視(S-24・専)
〔か〕川上辰男(S-26) 川島康一(T-8) 川村寅夫(S-23・専) 河田義治(S-22・専) 片山本善(S-25) 片岡静雄(S-22・専) 笠井昭次(S-24・専) 笠尾英一(S-23・専) 金井節雄(T-8) 金子佐太郎(S-40) 金井良昭(S-26) 影山友秀(S-25・専) 加茂正美(S-16) 加島武四郎(S-19) 加藤良治(T-12) 加来三

千孫(T-13) 加瀬四郎(S-40) 神田惠三(S-36) 亀井久芳(S-23・専) 甘露寺順孝(T-12) 海谷秀(S-22・専) 菅野道三(S-21) 顔惠民(S-29) 鎌居宏(S-40) ウー.カー(T-11)
〔き〕桐谷明雄(S-36) 北野誠(S-32) 岸上順一(T-13) 木村伊織(T-9) 木瀬信夫(S-10)
〔く〕久保昭(S-23・専) 久保田敦(S-36) 久保征之(S-35) 久保木信次(T-3) 久保山尚志(S-22) 隈上三蔵(T-15) 桑原政治(S-30) 黒崎豊(T-5) 熊切勲(S-26)
〔こ〕五島邦夫(S-23・専) 甲野克洋(S-36) 後藤閣一(S-26) 近藤悦哉(S-22) 小谷善次郎(S-24・専) 小林正雄(S-15) 小西宗明(S-14) 小笹太郎(T-14) 小松長敬(S-23) 小柴(金井) 哲夫(S-13) 河野俊雄(T-8) 郷原清(S-24・専) 高銘容(S-39) 黄延勲(T-8)
〔さ〕酒井礼男(S-34) 酒川喜代造(S-25) 坂田勇(T-14) 佐藤光信(S-22・専) 佐藤卓二(T-14) 佐藤政右衛門(T-6) 佐藤昭二(S-26) 佐藤一郎(S-19) 佐藤恒誠(S-22) 佐野菊次郎(T-4) 佐々木芳之助(T-3)
〔し〕正野豊(T-2) 新庄敏男(S-34) 斜森乾三(T-15) 柴田三郎(S-18) 白土森康(S-33) 清水忠一(S-16) 清水年夫(T-13) 清水幸徳(S-24) ラハマッドシヤー(S-40) 渋谷八造(T-12)
〔す〕杉田久和(S-26) 杉本哲五郎(T-12) 鈴木真(S-23・専) 鈴木昭(S-23・専) 鈴木祥夫(S-40) 鈴木浩啓(S-26)
〔せ〕関谷今朝繁(S-24・専)
〔そ〕祖父江周三(T-7) 祖光勲(T-4) 宗田惣一(T-7)
〔た〕辰巳雅哉(S-36) 竹内正栄(T-9) 竹内一郎(S-24・専) ……以下次号に続きます

資源工学会

東京都新宿区西大久保4-170 電話(363)3211

早稲田大学理工学部資源工学科内

内線 381

(非売品)